

山賤

長唄 全詞章

作詞者・作曲者・初演年不詳

変化物「七変化」の第六

〔三下り〕 実にや薬と菊の水、同じ流は遠近の、老を養ふ滝川の、詠めはいづれ面白やし
しばし休らひるたりしが、山ほととぎす音づれて、いま一声の聞かまほし

休む重荷に肩をかし、さやけき月に影移す、八十の波の花も咲き帰る

山路を漸々に、そろそろとたどりたどりて歩み行く

わしが若いときやな、なんなん難所の山でも、いかなる海川なりとも、ほんにほんに
千里一とび

今ではさりととはさりととは杖がなければならねえならねえ、今は帰らん我が庵へ